
エキセントリック・ビューティ

雑談編

炊飯器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エキセントリック・ビューティ

雑談編

【Nコード】

N8254S

【作者名】

炊飯器

【あらすじ】

笑いは日常の何気ない会話にこそつまってる！

そんな笑いを求めて、漆根耕太は今日も喋り続ける！

A c t 1

夢（前書き）

これは『エキセントリック・ビューティ』のキャラによる雑談をまとめた番外編です。興味が湧いた方はぜひそちらもどうぞ。

「春日井さんってさ、将来の夢とかがあってある？」

「前にも話したかもしれないけど、今のところ特にないわ。大学には行くつもりだから、早めに方向決めはしておかなくちゃとは思っているんだけどね。ただ、実を言うとまだ文系か理系かも決めてないのよ。漆根君は？そのどうでもいい夢を話して頂戴」

「どうでもいいって・・・僕は、仙人かなあ」

「まあ、素敵じゃない、応援するわ！」

「いや、そんな抑揚の全くない口調で応援されても」

「もう今から山にこもることをお勧めするわ。そしてもう、帰ってきちゃ、ダメよ」

「捨て猫！？僕は捨て猫かつ！？」

「・・・漆根捨て山」

「そんな姥捨て山みたいな。21世紀にもなってなんて非人道的なことを・・・」

「そうね、先月漆根廃棄禁止令が発令されてしまったし」

「国会の先生方は何て無駄な時間を！？ていうか全国の漆根さん、僕のせいでごめん！」

「そして、先週漆根根絶令が出されたから」

「おかしいでしょ！なにそのピンポイントな人権侵害」

「大丈夫よ。これから1週間、鬼から逃げ続ければ生き残れるし望みをかなえてもらえるらしいわ」

「僕は佐藤じゃない・・・漆根じゃあ逃げる人が少なすぎないか？」

「そして鬼は全国の佐藤さんで構成されているわ」

「一方的なリンチだ〜！！」

「これはあれね。佐藤さんによる反撃ね」

「何で漆根に反撃してんのっ！？結局権力に屈しちゃったの！？」
「さあ。佐藤さんに告白したからじゃない？」
「う、く・・・割合的に多分何人かにしたけれど、そんなことしたら僕はいろんな苗字の人に追いかけられる羽目に・・・」
「ええ、今全国から春日井さんたちが続々とこの街に集まってきているわ」
「恐怖っ！」

「そういえば、さつきさんの身体能力つてもものすごく高いですけど、実際どれくらいのことができるんですか」

「ふむ、そうだなあ。昔は暇だったからいろいろとやったものだ。

正直幽霊だから身体能力が高いのか、鍛えたから高いのかはよく分からないんだがな」

「どちらにせよ僕が痛いことには分かりません」

「確かに、君は痛い男だ」

「いや、人間性じゃなくて普通に痛覚のことですよ……。何で突然僕は「痛い男だ！」とか宣言しちゃってますか!?!」

「だが、事実だろう?」

「……。まあ、周りの評価がそうなのは僕も認めざるを得ません」

「そういえば私がどんなことができるのか、だったな。そうだなあ、とりあえず車よりは速く走れるな」

「そんなこととりあえざれても困ります。超人じゃないですか!」

「ああ、鳥人だ。空も跳べる」

「初耳つ!」

「何を言っている、君も浮けるではないか」

「うれしくないうれしくない。僕は浮きたくても浮いてるわけじゃない」

「そして私は動体視力も凄いで。飛んでいる蠅を箸でキャッチできる」

「すげえ! 武道の達人じゃないですか!」

「ああ、ただし、耕太の箸限定だがな」

「なにつ!……。ああ、だから覚えもないのに前に箸が濡れてたのか。わざわざ洗ってくれてたんですね。ありがとございます」

「あ、いや……。あれは力を入れすぎて蠅をつぶしてしまっただけです」

「なんてことを！・・・まあ、洗ってくれたならまだいいですよ。昔のことですし」

「だからこっそりと箸を戻しておいたのだ」

「うそだー！！じゃああれですか、僕は蠅の体液舐めながら「今日の夕飯おいしいなあ」とかつむぎに言っちゃってたわけですか！？」

「あ、いや、それは謝罪しよう。私は口下手でな」

「どの口がっ！？」

「口下手な上に笑い上戸だからな、あの箸を使って笑顔を浮かべている君を見てたらおかしくっておなかが痛くて何も言えなかったんだ」

「明らかにわざとだっ！」

「ものすつごく聞きたくないんだけど、やっぱ聞きたいことなんだけどさ」

「なんだよ漆根、聞きたいことがあるなら聞けよ。お前はほんとにツンデレだなあ」

「殺すぞ。．．．お前ってどうやってあのモデルみたいな彼女ゲットしたの？」

「がつつくなあ、おい。そんなに彼女が欲しけりゃ斡旋してやろうか？」

「屈辱だ！決して人には言われたくないセリフだ！」

「そうだな、話してやろうか。『時は戦国．．．』」

「．．．．．」

「つておい！どこ行くんだよ、漆根。ちゃんと聞いてけよ」

「何で手首をつかんで制止するだけじゃ飽き足らず胸をつかんで僕の身体を高く掲げたんだよ。ジャーマンされるかと思っただろ！」

「だが、今からお前を上下逆さにしてパイルドライバーをするつもりだったんだ」

「．．．どっちにしろ僕の脳ミソぐちゃぐちゃになるんだな」

「それがいやなら聞いてけよ」

「はあ。．．．まさかお前にノロケ話を聞かされるとは思わなかったよ」

「悔しかったら彼女作ってみろ。ま、お前にゃ無理、か。．．．悪い」

「謝るなよ！そしてそんな目で見るなよ！この広い世界には僕と付き合ってくれる娘だつてきつというよ！」

「ああ、．．．ガラパゴスゾウガメとか？」

「何で爬虫類なんだよ！しかもなんでそんなピンポイントなんだよ」

「コモドオオトカゲとか？」

「現代のドラゴンっ！？・・・もういいよ。僕をけなす暇があったら早く喋れ」

「ちっ、暇人のクセによ」

「そういう事はもつと小さい声で言え！」

「まあ、合コンだな」

「・・・えらく普通なんだな」

「まあな。合コンで行った店のウェイトレスで、当時の男が暴力団の組員で、俺は彼女を救うために乗り込んだな・・・」

「及川ならありえなくもないと思えてしまっのが辛い！」

「ま、今となつてはいい思い出だよ」

「お前は、ノンフィクションでハリウッドにでも出るといいよ・・・」

「

「つむぎってさ、基本的に何でも食べるけど、これが特に好きって物はあるの?」

「なに突然、ついに妹のあたしまで守備範囲に入れたの?」

「僕は妹の好みを聞いてちゃいけないのかよ……。いや、とくに意味はないんだけどさ、この食卓に会話と言う花をもたらすために」

「あたしは観賞用の花は嫌いなよね。あんなのかわいそうじゃない。植物は植物で自然のまま育つべきだわ」

「ああ、そうかい。じゃあ食卓が気まずいままにならないように」

「あたしは食事をしながら喋るつてのがあんまり好きじゃないのよね。給食の時間もあたしだけは決して喋らないわよ」

「それは、どうなんだろう……。ああ、めんどくさい! 教えて下さい、つむぎさん!」

「そこまで言うなら……」

「素直じゃないなあ」

「なんか言った!?!」

「いえ、なんでも……。それで、なに?」

「まあ、食べ物の趣味なんて変わるけど、最近は……。臍物かな?」

「ぞうもつつ!?!」

「レバー」

「最初からそう言えよ! 今一瞬僕の妹が食人鬼か何かなんじやないかと不安になったぞ!」

「しょうがないじゃない、普段カタカナ語として使われている語もちゃんと日本語に訳さないと丸もらえないのよ!」

「それは大学入試の中でも最難関の大学の英語の和訳だけだ。日常生活で誰に丸もらうんだよ……」

「ん? ああ、あそこにいる長谷川さん」

「長谷川さんっ!?! お前にも幽霊が見えるのかっ!?!」

「冗談よ。・・・あれ？お前に『も』ってなに？」

「あ、いや、こっちの話」

「ああ、はいはい。耕兄の脳がやばいって言う話ね」

「くっ……。状況が状況だけにあんまり反論するとさつきさんを否定するみたいでつらい」

「シユウ君がつむぎとの初デートにアクション映画をチョイスしたのは中2としてはかなりのナイスチョイスだとは思うけどさ、どうなの？映画と違って好きなの？」

「そんなに好きじゃありませんけど、テレビでCM見て面白そうなのがあったら見に行く、くらいですかね」

「ああ、それなら僕もわからなくもないよ。最近はずっぱりだけど、昔は頻繁に1人で足を運んでいたもんだ」

「あ、いや、僕は友達と・・・」

「ええっ！？映画を複数の人と見に行くの!？」

「いや、その発言にびっくりです」

「僕は殴ったり蹴ったりつてのがあんまり好きじゃないからさ、恋愛系のほうがいいなあ。おすすめはそうだな、去年放映した『昨日の風は吹き去った』かな」

「また微妙に後ろ向きなタイトルですね・・・」

「うん、多分前作の『今日の風はさつき通り過ぎた』をもじったものなんだろうけど」

「漆根先輩の前で言うのもなんですけど、こんな僕でも突っ込みに目覚めてしまいそうなタイトルです」

「いやいや、实际いい話だったよ。見た後と見る前じゃ人が変わっちゃうね」

「へえ、そんなに感動するんですか？」

「うん、まあ感動というか感情が激しく動くと言うか、黙ってみられないね。劇場にいた観客の『そこはキスだろ!』の声がピツタリ揃った時は体が震え上がったね。劇場から出たときはどんなボケでも突っ込みの喜びに目覚めているよ」

「漆根先輩の根源ですね・・・僕は見ないようにします」

「おすすめなんだけどなあ。まあ、ほかにもいろいろ見たなあ。な

んていうか、恋人がいる気分……なれるんだ、よね」

「あつ、なんかすいません」

「いやいや、シユウ君が謝ることじゃないんだよ。僕だって2歳も下の中学生に先を越されたからって落ち込むほど小さいやつじゃないさ。ましてや妹の彼氏ならなおさらだ」

「あつ、そうなんですか。じゃあお言葉に甘えてはしゃぎます」

「いや、僕の話聞いてた？」

「僕には彼女がいるぜ！イエーイ」

「ごめん、首絞めてもいい？」

「……すいません」

「漆根君は散々自分の頭が悪いつて言ってるけど、なにげにこの学校偏差値高いのよね」

「うん、まあ、近隣では一番高いよね。何でこんな田舎町にあるんだ、って感じだけど」

「そして何で漆根君がいるんだって感じよね」

「いいじゃん別に！」

「本当にシヨックだったわ。私たちってちょうど隣の中学でしょ」

「まあ、そうなるね。家が近いから必然的にそうなる。それで？」

「だからわたしたちの学校にも隣の中学の問題児2人の名が轟いていたわけよ」

「問題児つて言うと、及川と・・・他にいる？」

「いいわよそんなところでボケなくても。それと間違えてるわよ。

及川君と漆根君じゃなくて、漆根君と及川君よ。少なくとも近寄らなければ無害な及川君とは違ってうちの学校にもちらほら被害者がいたから」

「ああ、だから僕は春日井さんの母校の男子に追い掛け回された訳ね。確か中3の春、だったかなあ」

「何で懲りなかったのかはなはだ疑問ね。そうすれば世界は救えたかもしれないのに」

「世界っ！？ていうかその文脈だと僕が世界を破滅させたみたいに聞こえるけど？」

「もちろんそう言ったのよ。文脈を読むなんて凄じじゃない。褒めてあげるわ」

「嬉しくない！」

「本当にかわいそうだったわ。及川君は近づかなければいい蜂、漆根君は何もしなくても近づいてくるゴキブリ」

「い、いま人のことをゴキブリって・・・」

「ああ、ごめんなさい！……ゴキブリさん！」

「僕に謝れ！」

「私に謝りなさい！」

「なんでっ!？」

「存在している事をよ」

「今までで言われた毒舌の中で最もキツイ一言だ！」

「それで、まあ家からも近いし、レベルの高いこの学校に来れば問題ないだろうと私は思ってたわけ」

「僕の心を今ズタズタにしたのに、いともあっさりと話を戻すね……」

「そしたら……なぜ2人と同じクラスに……」

「災難だったね。……ってこれは僕が言っちゃいけないか」

「そしてなぜ私が最初に毒牙にかかったのかしら……」

「それは春日井さんが一番きれいだ……っ!!……いってえ。」

えっ、春日井さん。何で人の頬思いつきりひつぱりたいまま走って行っちゃったの!？ちよつと、春日井さん？春日井さん!」

「漆根君って自分の事勉強ができないって言ってるけど、そこまで落ちぶれている訳じゃないのよね」

「いや、まあ、入学して最初の実力テストで順位が一桁だった春日井さんに言われても見下されているようにしか思えないんだけど」

「何を言っているの、人聞きの悪い。「ように」「じゃなくて見下しているのよ」

「でしょうね!・・・うん、まあ、落ちこぼれてほどじゃないけどさ、でもやつぱり下から数えた方が早いわけで・・・」

「人間は底辺なのに・・・」
「底辺っ!?!」

「シユードラじゃないわ。アウトカーストよ。アンタッチャブルよ」
「不可触民!?!・・・高度なボケを」

「こういうところにちゃんと突っ込めるあたり国語と社会はできるんじゃないかしら」

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・何か言つてよ」

「あれ?今の純粹に褒められただけ?てつきりここから罵声を浴びせられて飴と鞭だと思つてたのに」

「そういうところはやつぱり底辺ね」
「くっ・・・確かに今のは自分でまいた種だから否定しきれない」

「上手くいったわ」
「策だったの!?!」

「まったく、なにをやっているのかしら。人間性でも学力でも一番下を取らないとダメじゃない」

「ダメなのっ!?!」

「ええ。ほかの人は「ああ、良かった、まだ下にあいつがいる」って考えて安心するのよ。まったく、人を下に見て悦ぶなんて下種の

極みね」

「いや、それ順位一桁の春日井さんに言われても……」

「上見て暮らすな、下見て献上」

「目を合わせることにすら許されないのか！？そして少ない収入の中から捻出して献上しなければならぬのか！？」

「それが人生よ」

「生きたくなくなった！」

「勉強ができる場合、大きく分けて天才型と努力型、そして天才でありながら努力型の3種類に大別できるわね。わたしは3番目だわ」

「自分で言った！」

「何を言っているの？こうして平和な国で勉強ができる事自体、それは天から与えられた才能じゃない」

「う、まあ、確かにそうなんだけどさ。ところで天には何があるの？才能ってというのは神様がくれるもんなの？」

「いいえ、彼は今莫大な借金を返すことで忙しいのよ」

「ついに神様が現代社会に負けたのか……」

「天には……シヨツピングモールがあるわ」

「やっぱり金で買ったのか！？……でもまあそういうことなら僕も一応天才型になるのかな」

「一緒にしないで……！！！」

「いや、怒鳴りすぎだよ……。ほら、あっちにいる人が凄いこつち見たよ。怒鳴る意味がわからないよ……」

「いいのよ、ほかの人のことは気にしないで。あなたは自分だけの殻にこもって、二度と出てこなければいいのよ」

「引きこもってない……まあ、言っても僕は帰宅部だからね。」

しかも趣味がないから、空いた時間にちよくちよく勉強はしてるよ。だから何もしない人よりはできる、くらいだ」

「ふーん、当たり障りのない回答ね。つまらないわ。妬まれて全ての教科書と資料集の著名人の写真だけ落書きされればいいのに」

「確かにそれは試験でその写真が出てきた時に誰か分からなくなっ

て困るかもしれないけど、教科書はともかく資料集は一ページに5人の著名人の写真はあるよ……。そんな時間あったら勉強しようよ……」

「いいのよ。漆根君が困るなら、人一人くらい安いものだわ」

「黒春日井だ!!」

「よし、耕太、働け」

「いきなり何をっ!？」

「いや、思ったのだ。耕太がバイトをすれば私のお菓子だったり私のシュークリームだったり私がほしい本だったりが無尽蔵に変えるのだろう?」

「なんで搾取ありきでバイトを勧めるんですか!」

「私の金を君が使えると思っっているのか、ばかもの!」

「僕のお金だっ!」

「ちっ、しょうがないな、割り勘で我慢してやる」

「搾取はするのか・・・」

「ところでバイトをするなら何をしたい?」

「そうですね・・・。飲食は・・・だめだ、客に悲鳴上げられるし。本屋は・・・客に悲鳴上げられるし。コンビニは・・・客に悲鳴上げられるし」

「済まなかった、耕太。配慮がなさすぎた」

「えっ?なにがですか?」

「もはや自分への対応に疑問すら浮かばなくなったか・・・」

「そうですね、やっぱり事務仕事ですかね。ああっ、でも紙に悲鳴あげられたらどうしよう!」

「耕太の頭がどうしようだな」

「じゃあさつきさんはどんなバイトを試してみたいんですか?」

「そうだな・・・あれだ、今はやりの「お帰りなさいませご主人さま」とか言うあの・・・」

「メイド喫茶ですかっ!?!是非見てみたい!」

「・・・あの店のみかじめ料をふんだくる仕事かしてみたい」

「ヤクザっ!?!」

「なあ、あの仕事をするにはやはり履歴書とかが必要なのか?」

「いや、知らないですけど……。やめた方がいいとは思いますが」
「そうか、残念だ。では、耕太、働け」
「だからなんで僕だっ！……そもそも校則でバイトは禁止されてるんですよ」
「破ったらむちうちの刑か？」
「ここはシンガポールかつ！！」
「いやいや、首をこきつとやってムチ打ちにする刑だ」
「そっちだって十分ひどいですよ！」
「しかたがないな。では今まで通り普通に搾取するとするか」
「搾取しているという自覚はあったんだ……」

A c t 9 告白

「委員長に告白したのって確か僕が中2の秋でしたよね？」

「そうよー。良く覚えてたわねー。私は忘れたかったのに」

「……………」

「んんー？冗談よ。本気にしちゃダメ。リラックスリラックス」

「大人だ、この人」

「リラックスしてくれないとフランケンシヨタイナーがかけられないでしょー？」

「悪魔だ、この人。何ゆえそんな超人同士の戦いでしか見たことない技を……………」

「そうよねー、わたしが受験勉強していた頃だったのよねー。本当にシヨックだったわ」

「シヨックですか……………」

「うん。告白されると未代まで不幸になると噂の君からだったからね。あーあ、これは落ちたなー、って。その後2週間受験勉強やめたもん」

「どつりで夏休み終わった頃から声をかけた人誰もが青ざめてた訳だ。ていうか早く気づけよ、僕。…………しかし受験勉強やめたのって僕のせいになっちゃうのか？」

「100%君のせいじゃないけどねー。まあ、受かったからもういいや」

「ほっ…………ありがとうございます」

「だから、ラ・ケブラータで手打ちね」

「なぜそんなリングのポストにたつて回転しながら相手に体当たりする『入水自殺』という意味の技をつ！？」

「おおー、知ってるねー。どう、今度一緒に観戦に行かない？」

「えっ、まじですか！？…………ていうか女子高生がプロレス観戦とか行くもんなんですか？」

「別に普通でしょ。まあ、そもそもいかにすれば君を闇討ちできるかを考えて、いろいろ見てたらはまっちゃったって感じなんだけどね」

「聞かなきゃよかった……。で、その殺したいほど憎んでいた僕となぜプロレス観戦を？」

「ほら、テンション上がって勢いのままリングに飛び出して、袋にされてみてよ」

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！！」

「パイプ椅子でレスラー殴って反撃されてみてよ〜」

「もうそれ熱狂とかじゃなくて観客が青ざめますよ」

「大丈夫よ、その時は観客をすべて被害者の会のメンバーで埋め尽くすから。大盛り上がりよ」

「治外法権が完成しちゃう……」

「どうせなら東京ドームでやるつか」

「そんなにメンバーいるんですかっ!？」

「そして映像を撮って全てのテレビ番組で生中継しよう。インターネットとか衛星も使って世界レベルでやっちゃおう!」

「もう地球に住めない……」

「あはは、冗談だって」

「どこからっ!？」

Act 10 小学時代

「最近実は耕兄は中学2年から生まれてきたんじゃないかと思ってるわ」

「うん、ごめん。朝初めて顔合わせて最初の言葉がそれって言うのは言葉も出ない」

「ああ、そっか。ほら、耕兄って私の夢に出てきたじゃない？」

「「じゃない？」とか言われても「うん、そうだよね」とか言うわけないじゃん！」

「出てきたんだから入場料払いなさいよ」

「無茶っ！」

「あと窃盗と器物破損ね。そしてちゃんと後で被害者に賠償金払っておきなさいよ」

「どんだけお前の中で傍若無人な男なんだよ、僕は。ああ、神様、ごめんなさい。僕はもう妹の天然っぷりについていけません・・・」

「まさか耕兄があんなことを・・・」

「よし、突っ込むのをやめよう！・・・それで、何で僕が中2という人生でもっとも馬鹿な時期から生まれてきたと思っただんだ？」

「ちよつとやめてよね。世の中には中二なのに青春を謳歌せず、アカデミー賞を取ろうと1人頑張っている中二もいるかもしれないんだから！」

「わかった、わかったよ。悪かったよ。どうやって1人でアカデミー賞という映画の賞を取れるのかという事にも言及しないから早く質問に答えてくれよ。さもなければお前がそこを動かないから顔を洗えないだろ？土曜日で学校のないお前と違って僕は今から学校なんだよ。腫れぼつたい目で学校に行ってみんなに笑われるわけはいかないんだよ、僕は」

「大丈夫よ」

「おっ、それは僕なら大丈夫という意味か？」

「うん、まあそうね。誰も耕兄の顔なんて見ないじゃない」

「くっ……。朝からキツイ一言だがそれについて反論することはできない！」

「・・・中二からの耕兄ってインパクトが強すぎて、小学校時代とかををほとんど覚えてないのよね」

「バカ言つなよ。確かにそれまでの僕は極めて普通な、空気のようなキャラだったけど、ちゃんとした子供だったぞ。ほら、従兄弟と一緒にバーベキューに行ったりとかさ」

「ああ、あれ・・・は、確か、耕兄はおなか壊して行けなくて、お母さんと一緒に家にいたんじゃないかな。それであたしだけ行ったのよ」

「しまった、自分で自分の存在を忘れてしまっていた！」

「アルバムに写真も残ってなかったし。お母さんに聞いたら「あれ？写ってない？」って感じだったし・・・」

「まずい！自分の存在に自信が持てなくなってしまった」

「だから耕兄はあたしたちの脳をちよつといじって違和感ないようにして、地球に飛来した宇宙人なんじゃないかなって。しかし自分も記憶をなくしてしまっただんじやないかなって」

「飛躍したな」

「地球の侵略？確かに周りの人を不幸にしてるし」

「被害が地味すぎる！！」

「だからもし記憶が戻ったらあたしの鍛えに鍛えた包丁術で止めてあげるって約束を夢でしたのよ」

「ああ、そこで夢に繋がっていくわけね。じゃあ妹を殺人犯にしないように、っていうか包丁術という面白い名称の術を永遠に見なくてすむように僕の記憶は永久に蓋をしよう」

「ええっ、いじわる！」

「お前、いいからもう一回寝て来いよ・・・」

Act 11 褒め合い

「そろそろ漆根君をけなすボキャブラリーも折り返し地点に達してきたわね」

「こんだけ僕をけなしといてまだ半分もあるのか。間違いなく春日井さん一生のうちに毒舌で5人は殺せるよ」

「まさか。私は普段毒舌は封印しているのよ。基本的に漆根君にしか使わないわ。漆根君にだけ、特別に使ってあげてるのよ」

「・・・それは嬉しくない特別だな。相手を選ぶってことだよな?」
「まあ、そうなるわね。だって、嫌われちゃうじゃない」

「それは僕には嫌われてもいいってことか?!?折り返して更に進んだな・・・」

「それどころかゴールしてももう一回走っちゃうわ。84・39キロマラソンよ」

「そんな、ボディーブローな・・・」

「でも漆根君は殴られても平気なんでしょ?超軟体動物だから」

「超軟体動物ってなんだ!?僕はぬめぬめしてないぞ」

「してるわよ!ぬめつとしててねとつとしててふにゃふにゃしてるじゃない」

「・・・ってこれ前にも聞いたことある!!なんでもうリスタートしてるの!?なにその早すぎるフライング」

「確かにそうね、お弁当を食べながらお菓子なに食べようか考えているようなものね」

「いや、確実に弁当食べながらお菓子つまんでたよ、今」

「つまりそれは、漆根君をいじめるのが人生のスイーツだと言いたいよね?」

「言ったのは君だ!」

「やれやれ、話が進まないわ。これだから暇人は・・・」

「更に一步を・・・。それに進める話でもあるのか・・・?」

「だからこの辺で一回横道にそれてけなし合いならぬ褒め合いを試みようと思うのよ」

「けなし「合った」ことは今がかって一度もないけど、褒めあってどうするの？」

「これはゲームよ。相手の褒め殺しに耐え切れなくなったほうが負け」

「いいよ。いやな予感しかしないけどやろう」

「罰ゲームはそうね・・・リコーダーを・・・」

「相手のを舐めるの！？それとも自分のを舐められるの！？そもそも僕にそんな願望はないし、春日井さんも嬉しくないだろうし、もう高校生にもなるとリコーダーなんてどこにしまったかも分からないし、いいことないよ？」

「早とちりね。この私がそんなこと提案するわけないじゃない。まさかそんな願望があるのかしら？」

「不愉快な発言だ！・・・でもさ、ほかにリコーダーの使い道なんてあるの？」

「・・・うん、その発言に漆根君の変態っぷりが集約されているといても過言じゃないわね。まさか中学時代にやったりしてないわよね。もしそうだったら私明日から転校するわ」

「大丈夫、僕にそんな度胸はない！正直自分のリコーダー舐めるのも恥ずかしいくらいだ」

「・・・明日から学級閉鎖にならないかしら」

「学級閉鎖か」。僕のいるクラスって小中の9年間毎年閉鎖されるんだけどさ、僕だけは一度もインフルエンザに罹ったことないんだよね。なんでだろ。リコーダーにウイルスでもついてたのかな」

「・・・つまりあなたは結局一度も自分のリコーダーを舐められなかったのね。漆根君を見誤っていたわ。いや、見くびっていたわ・・・」

「えっ、そんな精神的にも物理的にも引かないでよ。せめて10メートルの距離を6メートルに縮めて会話しない？それで、結局罰ゲ

「ムはなに？」

「そんな変態っぷりを聞いてしまった後では何のインパクトもないのだけれど、夕飯を箸ではなくリコーダーを使って食べるのよ。家族に理由を聞かれたら、「負け犬なので罰を受けている最中です」と答えるのよ」

「ええ〜！発言はともかくリコーダーで！？そんなの一生もの恥だよ。下手したら家族に笑いものどころか瞬時に縁を切られるよ！」

「まさか、あなたの家族も異常なの・・・？」

「でもさ、春日井さんが負けたらそんなこと言うの？言えるの？」

「そうね、私にその苦行を味合わせてもいいなら存分に勝ちなさい、と言っておくわ。ただし、言わせたら一生軽蔑するけど」

「勝ち目がなくなった！！」

「それじゃあスタート」

「やつとか。そしてものすごくいやな予感がする」

「そうね・・・まずは、直立二足歩行ができる」

「はい、予感的中・・・なにそれっ！？」

「あれ・・・？その突っ込みはつまり、褒め殺しに耐え切れなくなつたということ？」

「うっ。いや、違う違う。僕はただ「南蛮仕立ての煮物、ソースはれんこん摩り下ろしの胡麻和え」を略しただけだよ。いきなり食べなくなつたから」

「そう、ならいいわ。次はあなたの番よ」

「突っ込んだじゃいけないルールなのか・・・。そうだな、頭がいい」「当然じゃない、なに言っているの？あなたとは生物学的に次元が違ふのよ」

「え、なにこれ。僕は褒めるたびにけなされるルールなの？」

「オプシヨンよ。えっと、次はね・・・ゴキブリを手づかみできる」

「やったことな・・・うっ。突っ込んだじゃいけないだった・・・みんなのことを考えられる！」

「当たり前でしょう、あなたとはコミュニケーションの幅が違うのよ。……舌が日本人の平均よりも3ミリ短い」

「ついに褒め言葉でもなんでもなくなっただな。そうだなあ……性格が明るい」

「虫ね。あなたみたいに地中から這い出てきた人類と一緒にしないでくれるかしら。……次は、えっと、うーんと……」

「うわあ、本気で悩んでいらっしやる。自分から振つといて考えてなかつたんだ……」

「……なんとかなってる」

「……」

「ほら、次はあなたの番よ」

「……これつてもう僕勝ってるんじゃないかなあ。次は……ああ、まだあれが残ってた……美人！」

「……」

「あれ？暴言がない。そして何で6メートルの距離を一瞬にして詰めたの？……いてっ！……いつてえ。あれ？ちよつと春日井さん！？人の頬ひっぱたいといてどこ行くの！？次春日井さんのターンだよ。春日井さん？春日井さん！」

「絵美ちゃんって会う人みんなにあだ名つけてるの？」

「うん、そうだねっ。ランクD以上の人にはだいたいつくねっ」

「ランクDっ!? そんなのあるの？」

「うん、おありだよ」

「相変わらずいい笑顔だなあ。ちなみにそのランクってどうやって決まるの？」

「うんつとねえ、主に顔と収入だねっ！」

「いやいや、世の中の穢れをまったく知らないみたいな笑顔でなに怖いこといつてるの!? それはもはや現代の悪魔の所業だよ」

「普通だよ。みんなやってるってこの前タアくんが言ってたよ」

「及川……。実の姉に何を吹き込んでるんだ……。じゃあランクE以下の人は普通に名前と呼ぶの？」

「ううん、基本的には呼ばないよ。朱に交われれば赤くなるでしょ？」

「マジで怖いなあ、この人……」

「そうだね、どうしても呼ばなきゃいけないときにはランクごとのあだ名を一括で使っちゃっ」

「ああ、そうやってランクごとに人間を振り分けちゃうわけだ。ちなみにどんなの？」

「うーんとねえ、Eはゴミでしょ。Fはカスでしょ」

「聞いたくなかった……。もう僕は絵美ちゃんの将来が心配だよ」

「虫でしょ、ゴキブリでしょ、奴隷でしょ、コウタンでしょ……」

「ちょっと待てっ! 今なんか変なのあった!!」

「あっ、ごめん。ゴキブリもちゃんと虫だもんね。節足動物門だもんね。一緒にしちゃだめだったね」

「そこじゃない! 明らかにそこじゃないよ!」

「えっ、何が……?」

「うわあ、本気で首を傾げてるよこの人……。何で僕のあだ名が

最後に出てきたの？」

「えっ？だつてランク だもん」

「オメガっ！？・・・絵美ちゃんの中では僕は奴隷よりも下の位置
づけだったのか。友達だと思つてたのに、素直に大シヨックだよ・

」

「泣いちゃダメなんだよ、コウタン！過去は乗り越えるものなんだ
よー！」

「いや、現在進行形でコウタンと呼ばれたよ。ちょっと可愛らしく
ていいかな、と思つてたあだ名だったけど、今度からそれで呼ばれ
るたびに僕のハートはズタズタだよ・・・」

「やだなあ、照れ隠しなんだよ」

「照れたとしてもランク に隠さないですよ・・・」

「よし、わかった。じゃあ今からコウタンのランクを上げてあげる。

・・・奴隷に！」

「最悪だっ！！！」

「ねえ、奴隷。絵美ちゃんおなかすいちゃった。何か食べに行きた
いなあ」

「いい笑顔だなあ・・・」

Act 13 テレビ

「漆根家って食事中にテレビとか新聞とか禁止だから必然的にゴールデンタイムの番組を見逃しちゃうわけなんだけどさ、どうなの？ クラスの話題についていけなくなったりしないの？」

「ついにあたしの友達にまで・・・」

「いや、違うからね！」

「どうしても見たい番組なら録画しておくし、今どきの中学生はゴールデンタイムのバラエティじゃ盛り上がらないわ」

「へえ、随分変わったんだなあ。僕が中二のときは話題についていこうと全ての局のバラエティとドラマを押さえていたもんだけどなあ」

「液晶テレビの寿命が短かったのは耕兄のせいね！」

「いや違うよ。僕はせっかく撮ったはいいけど、結局見てないから一番見てるのってやっぱりつむぎじゃないか？」

「違うわ！夜中にこっそりスケベな番組見てるくせに！」

「いや、仮に見ていたとしてもそれを目撃してるお前は何で起きてるんだって話になるよ」

「あたしはいいの。クラスじゃ『深夜番組の女王』と呼ばれているんだから」

「それを最初に呼んだやつを連れて来い。血祭りに上げてやる」

「あたしだけど・・・」

「お前かよっ！！自分の通称を自分でつけるなよ。すごく切ない気分だよ。・・・って、やっぱりお前が見てるんじゃないか」

「み、見てないわ。あたしは寝るべきか見るべきかを真っ黒なテレビ画面の前ですつと葛藤しているだけよ」

「やだよそんな妹・・・。それに液晶の寿命が短かったのは、確か衝撃のせいじゃなかったか？」

「あたしじゃないわよ。あたしは学校で一日に「漆根」と呼ばれた

回数しか殴ってないもの」

「明らかにお前だよつ。いい加減漆根であることを諦めるよ……」

「耕兄のせいよ」

「僕のせいっ!? 明らかに父さんの家計から受け継がれてきた苗字なのにな?」

「耕兄が全国の漆根さんの地位を貶めたのよ。だからテレビが壊れたのも耕兄のせいよ!」

「うっ、それを言われたら……っていやいや、テレビにあたったお前にも非があるよ」

「むむむ……。素直に耕兄を殴っておけばよかつたわ」

「怖いわっ! 僕は毎晩妹に何十発も殴られる日課を持たなくちゃならないのか!」

「しょうがないじゃない、テレビのためだもの。テレビは大事なのよ!」

「お前は本当に矛盾を内包してるよなあ……」

Act 14 散歩

「君はよく散歩、というか徘徊をしているな」

「まあ、そうですね。ぶらぶらしながらぼーっとできますからね」

「なぜだ、なぜ引きこもらない・・・」

「さつきさんは僕をいつたいたいでしょうか!？」

「人造人間に改造したい」

「シヨツカー!？」

「まあ、僕の散歩は言うならば家を追い出された結果ですね。つむぎが家に友達を連れてくいるときは僕は追い出されている方が多いんですよ。この前は例外的に風邪をひいていたから許されたんですけど」

「引きこもりが家を失ったのか・・・。かわいそうに」

「そんな憐れみを込めた目を向けないでください。それに引きこもってないですから」

「だが、深層心理では引きこもることを望んでいるはずだ。こんどクローゼットに収納してやろう」

「それは引きこもりじゃなく押しこもりですよ!」

「押ししてもだめなら引いてみな、というからな。逆もまたしかり、だ」

「うまつ!素直に感心しちゃったよ」

「そうだろう。そしてクローゼットに鍵をとりつけて出られないようにしてやる」

「監禁っ!？」

「いないことを誰にも気づかれなかったりしてな。ははっ」

「いや、笑えない笑えない。こんなところに監禁されたらすぐに窒息死しますって」

「大丈夫だ。この中にはどこでもドアがあるからな。ほら、探してみろ。写メに取ってやるから」

「最近知った単語を使ったがるなあ。やりませんよ！昔は週に2回はやりましたけどもうやりません！！」

「そうか、私の『写すのはメンドウだけど、しょうがないか、はあの使いどころかと思っただけかな』」

「そんな略語あるかあ！！」

「とりあえず君の両手両足だけでも縛っておくか。やれやれ、めんどくさい」

「じゃあやるなっ！！」

「仕方ないだろ、そうしなければ改造ができない。君を生身のまま戦わせるわけにはいかない」

「僕の敵は間違いなくあなたですよ……。僕を改造したらシヨッカーの二の舞ですよ」

「及川って不良のくせにタバコ吸わないよな。なんでそんな中途半端なんだよ」

「いちいち突つかかってくるな、お前は。なんだよまたつられたのかよ」

「くそつ、なんでこいつの精神はこんなにタフなんだ・・・」

「やれやれ、タバコを知らないお前に俺が特別にタバコ講座をしてやる。いいか、タバコは健康を害する。以上だ」

「誰がそんなんで納得するんだよ！」

「俺だ」

「お前かよっ！」

「うるせえな。お前も俺みたいに姉ちゃんに毎日このセリフを言われてみる」

「ああ、なるほど、絵美ちゃんに言われてるのか。さすがシスコン」
「黙れ」

「確かに絵美ちゃんはタバコ嫌いそうだもんな。絵美ちゃんがタバコ吸つてるところ見たら僕発狂するかも」

「姉ちゃんはしねえな。ただこの前タバコに火をつけて遊んでたからな」

「なに、そんな片鱗を見せてるの？僕を発狂させる気なの？」

「いや、よっぽど憎いらしくてスタンガンでつけてたんだ」

「うわあ。どうすんだよ、及川。そのうち地球上の電力の半分が絵美ちゃんのスタンガンに消費されることになるぞ」

「ああ、そうだな。俺も毎朝スタンガンで起こされるのはこりこりだ」

「もう及川の家に泊まるのはよそう・・・」

「今度避難させてくれ」

「駄目だ。絵美ちゃんなら絶対僕んちに忍び込んで僕とお前をスタ

ンガンで起こすから」

「ちっ。姉ちゃんがお前を殺せばこれに懲りてもうやめると思ったのよ」

「姉にトラウマを与えようとするな！」

「委員長って僕が入学してきた時から委員長でしたけど、どうやって委員長になったんですか？」

「んん？それは涙なしでは語れないよ？」

「あ、そうなんですか。でも大丈夫です、今日はハンカチを持っています」

「よし、じゃあ特別に話してあげよつかな。まずね、中学3年という職業の時に高校の文化祭を経験するのね。そしてその後ある日突然のイベントで人生に絶望してみるの」

「……………」

「はい、そして高校一年生に転職した時に、文化祭委員を経験するの。そしてその後、その職歴を生かして様々な上級職のうち、どれか3つを経験すると、なれるのよ」

「なんかドラ エっぽく説明しようとしたみたいですけど、途中から完全にド クエの転職方法になっちゃってますからね。しかも勇者なんですか？」

「あつちやあゝ、またやつちやった」

「またつてなに！？こんな記録的なボケを繰り返しているのっ！？」

「まあ、私が勇氣ある者であることは否定できないでしょ」

「えっと、残念ながら僕は委員長が世界を救う瞬間に立ち会えなかつたんですよ」

「だって、こうして君と普通に話してるじゃない」

「僕の周囲は勇者だらけなんだ……。世界が何回救えるんだろう」

「ええ、勇者が本当に世界を救えると思ってるの？所詮ただの人間よ」

「あつ、そこで現実に立ち返っちゃうわけですね」

「うん。人間だから漆根君にはバクドロップしか出来ないのよね。残念」

「十分すぎる……。僕は委員長の中でどんだけタフな男なんだ」
「だってどんなにフられてもへこたれないじゃん？」

「へこたれますよ。体の膨らみが全部しぼむくらいへこたれてましたよ」

「あつそう。どうでもいいや。それで、一年生の文化祭委員のうち立候補を募るのよ」

「絶対前フリいらさないし、今の会話も不要でしたよね。じゃあ、僕でもできるんじゃないですか？」

「ああ、それは無理よ」

「やっぱり周りの信任とかですか？それならゼロ票になる自身はありますけど」

「それもあるんだけどね。多分立候補した瞬間に全員で漆根君の足をつかんで窓から吊るし上げるから。そして布団を干すみたいにワサワサやるから」

「ワサワサって、なんか凄いオブラートの包み方してますけど、よくするに逆さ吊りの僕は宙に舞ったりしちゃうわけだ……」

「凹んでも大丈夫なんですよ？」

「いや、精神面だけ……って言うか精神面もダメですよ！見て下さい、傷つきすぎた僕の体たらくを……。ていうか女子はともかく男子はその宙吊りに参加しますか？いや、女子でも参加しない人がいれば、先生に報告されてちよつとめんどくさいことになりませんか？まあ、先生が僕を擁護してくれるかは別として」

「なに言ってるの？大丈夫よ」

「何が大丈夫なのかサツパリです」

「あ、そっか。知らなかったんだっけ。文化祭委員は君に告白された女子及びその関係者で構成されてるのよ」

「こんなところに被害者の会の中枢がつ！？」

「うっん、それは違うよ。本部はもつと日本の中枢に食い込んでるから。あくまで支部よ」

「僕は何て四面楚歌だったんだ！もうあの会議に参加するのが怖い

よ・・・」

「大丈夫。人間って結構しぶといのよ。頭に鉄パイプが刺さっても生き残った人だっているんだから」

「笑えない情報です。僕に今年の夏休みはあるのかなあ・・・」

「昨今ではいじめがどうとかって色々言われてるけどさあ、どこからがいじめでどこからがそうでないのかって意外と難しい問題だね」

「そうかしら、簡単じゃない」

「なに？優等生ともなるといじめをスキャン出来たりするの？」

「私が楽しければいじめじゃない。楽しくなければいじめ、よ」

「よ・・・じゃないよ！加害者の都合押し付けまくりかつ！？」

「だから漆根君はいじめられてるわね」

「楽しくないのっ！？じゃあ、せひともやめよう、今すぐやめよう」

「そう、さようなら。あなたには毒舌以外何も話すことなんてないわ」

「ごめんなさい、いじめて下さい。・・・ってなにこのセリフっ！？自分で言っただけで超びっくりだ」

「・・・とまあ、こんなふうには本人がいいと言っていればいいんじゃないかしら」

「ああ、なるほど。さすが春日井さん、冗談がお上手で」

「ありがとう。冗談みたいな人生送っている漆根君に言われるとチャンチャラおかしいわ」

「褒めたのに・・・」

「だから私は最近いじめが騒がれているのは、被害者側のハードルが下がったからだと思うのよ。全てのいじめられっ子が漆根君だったらどうかしら。案外いじめなんてゼロになるかもしれないわ」

「日本一僕をいじている自信があるんだね・・・」

「当然よ。私はなんでも一番じゃないの気がすまないのよ」

「いや、そんなこと胸を張っていわれても。心優しさでもせひ一番でいて欲しかった・・・」

「え、なに？それは金輪際私とは話したくないという事・・・？」

「ごめんなさい。今のままの春日井さんが一番素敵です。・・・と
ころで、クラスで誰かがいじめられてるとしたら春日井さんならど
うする?」

「ま、私は漆根君みたいに見て見ぬふりはできないわね」

「勝手に僕の前提をつけないで!!」

「顔に書いてある・・・ああ、そういう顔か」

「どんな顔っ!??」

「私だったら、そうね・・・はぐわね」

「盗賊みたいだな。いじめっ子の筆箱を奪うとか?逆にいじめ返し
てやれ、見たいな感じなの?」

「いいえ。皮をはぐのよ」

「猟奇的な春日井さんっ!??」

「漆根君が誰かをいじめる日を楽しみにしてるわ」

「ああ、母さん。今日も僕はいい子です」

「絵美ちゃんって電車で行ったところにある公立高校に行ってるんだよね?」

「うん、そうだねっ」

「毎朝電車で行くのめんどくさくない?」

「そんなことないよ。電車好きだもん」

「へえ、そうなんだ。ほら、朝は混むじゃん?僕は満員電車が嫌いだよ」

「うん?朝って混むのかな?」

「あれ?さすがにこのあたりが田舎でも朝は通勤とか通学のラッシュがあるでしょ」

「絵美は知らないよ。絵美の周りはいつも誰もいないもん」

「へえ、穴になってる時間があるのかな?」

「あっ、そういえば隣の車両はいつもぎゅぎゅ詰めたね。絵美の乗ってる車両はほとんど絵美しかないよ」

「スタンガンだ!絶対スタンガンのせいだ!」

「ええ、スタンガンってそんなに痛くないよ。絵美は知らないけど、タア君はそう言ってたもん。毎朝起こすときに使っけど笑顔で許してくれるもん」

「それは間違いなく笑うしかない状況だからだよ!・・・絵美ちゃんそのうち絶対警察に捕まるよ」

「警察?あっ、一回声掛けられたな」

「ほら。・・・って、あれ?声掛けられただけ?」

「なんかすごく怒られたけど、最後には大声で謝りながら「許してください」って言ってたよ」

「・・・・・・・・」

「どうしたの Kou-tan?」

「僕の人生はどこで間違えてしまったんだろう。どうしてこの子に

出会ってしまったんだろうか」

「どうしたの？なんでそんなナレーション口調なの？そんな時はシヨックを与えれば治るらしいよ」

「絶対誰もそんなことは言っていないはずだ！」

「大丈夫、ちよつとバチツていうだけだから」

「絵美ちゃんにとってはね！こつちはバチツじゃ済まないんだよ！いや、ちよつと本当にやめて……！！！」

「あ、電池切れた……」

「ああ、本当に死ぬかと思った。生きてるって素晴らしいなあ」「残念」

「絵美ちゃん。今度から僕といるときはスタンガンは僕が持つ」

「ええ、やだー！」

「やだじゃない！駄目だっていうならもうアイスおごつてあげないよ」

「うう、わかったんだよ。しょうがないんだよ。背に腹は代えられないんだよ」

「なんでこの子こんなにアイスに動かされるのか……」

Act 19 誕生日

「委員長って誕生日いつなんですか？」

「んんん？それは地球暦で言えばいいのかな？宇宙暦で言えばいいのかな？」

「どっちもまだ科学が進んでいないのでできれば西暦でお願いします」

「太陽暦？太陰暦？」

「えっと……」

「旧暦？新暦？」

「ただだけ僕に誕生日を教えたくないんですか！！」

「だってそんなことしたら私と同じ誕生日人全員に迷惑がかかるじゃない」

「いや、理屈が徹頭徹尾わかりません。なんなんですか、僕に誕生日を知られると何があるんですか！？」

「気分が悪いよ」

「もっとオブラートに包んでほしかった！！」

「そういう漆根君は？人に尋ねるときはまず自分からでしょう？」

「あつ、そういえばそうですね。えっと、僕は……」

「やっぱいいよ。もうわかったから」

「エスパー！？」

「2月29日でしょ？」

「いえ、全く違いますけど、何ですか？」

「そして今16×4で64歳くらいでしょ？」

「閏年生まれの人はその年齢の数え方はしませんよっ！！」

「なーんだ。4年に3年は活動しなければいいのに」

「こち亀の日暮さんっ！？……もちよつと違っけど」

「違っのかあ。何をしてるんだか」

「誕生日に関して僕に文句を言うのはやめてください。……僕の

誕生日は」

「あ、やっぱりいいよ」

「え、何ですか？」

「だって漆根君の誕生日を知るとか・・・」

「知るとか・・・？」

「気分が悪いよ」

「だからオブラートを・・・」

Act 20 ツンデレ

「このテーマで春日井さんに話しかけるのはいささか危険すぎる気がするけど、春日井さんってツンデレってわかるの？」

「何を言っているのかしら、漆根君が知っていて私が知らないことがあるわけじゃない」

「いや、そこまで僕の人生は春日井さんに先回りされてはいないと思うけど。・・・わかるんだね？」

「ええ、新作のドーナツでしょ？」

「そんなポン・デ・リングみたいな・・・」

「ツン・デ・リングはおいしいわよね」

「レングってなんだ!？」

「冗談よ。そうねえ、確かに誰かが私を指してツンデレと言ったことがあるけれども、私は別にデレた覚えはないからその人を刺し返したわ」

「字が違うっ!?!何を刺したの!?!」

「それを言っていると犯罪になってしまうからお口にチャックをさせてもらうわ」

「表現方法がかわいいからと言って僕はごまかされないぞ!間違はなく口にしないで犯罪のはずだっ!?!」

「あれよ。みんなでかき氷を楽しむために大きな氷を砕くときに使うとても便利な器具よ」

「アイスピックだ〜!?!」

「しょうがないじゃない。氷と間違えたのよ」

「人間をつ!?!しかも明らかにその前までしゃべってた相手なのに・・・」

「私を形容するならばツンハア?がふさわしいかもね。ちょっと中国俳優みたいでかっこよくない?」

「確かにちよっとユニピョウみたいな響きだけど、しかしてその実

態は相手に対して冷徹に対応し、しかも最後には「はあ？」と蔑みの視線を加えるという萌え要素0のキャラだよ！？いいの、そんなんで！？」

「やれやれ、漆根君はわかってないわね。これから訪れる時代にはツンハア？こそが萌えキャラの筆頭として理解される時が来るのよ」「いやだよ、そんな殺伐とした社会は！！！」

「何を言っても周りから冷たくあしらわれる漆根君。考えるだけで愉快だわ」

「なぜモデルが僕だっ！！！」

「ほかの人にそんな苦行を味あわせようというのっ！？」

「え、なに、そのうち僕以外のすべての人類がツンハア？になるの！？」

「いいじゃない。全ての人から特別扱いされる漆根君。考えるだけで愉快だわ」

「やっぱ僕の精神がズタボロになることを知っているんじゃないか！！」

「そんなこと言ってないじゃない。はあ、ここまで漆根君に信用されてないとはね。悲しくなるわ・・・」

「あ、えつと、ごめんなさい」

「罰として私をツンデレだと言ってみなさい」

「やだよ！確実にアイスピックが降り注ぐじゃん！！」

「仕方ないじゃない。等価交換よ」

「僕への見返りがないっ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8254s/>

エキセントリック・ビューティ 雑談編

2011年5月29日02時55分発行